専修人文論集99号
451-477，2016

和田垣謙三・星野久成訳『グリム原著　家庭お伽噺』——底本と翻訳

西　口　拓　子*

はじめに

日本におけるグリム童話の翻訳は，明治期に始まる。世界的にみれば，開始は遅かったものの，[1] 関心は高く，これまでに多数の翻訳・翻案が出版されてきた。本稿の考察対象は，1909（明治42）年の和田垣謙三と星野久成の共訳『グリム原著　家庭お伽噺』（小川尚栄堂，以下『家庭お伽噺』と略す）である。これは，『グリム童話集』の58話を翻訳したもので，すなわち「それまでの最大の訳書である橋本青雨訳『独逸童話集』の二倍以上」[2]の話を収めていることになる。筆者が入手した古書は1919年の第18版で，10年後にも増刷されたほど好評だったことが分かる。和田垣と星野が，同じ出版社から1910年にアンデルセンの『アンダーセン原著　教育お伽噺』，さらには1916年にセルヴァンテスの『ドンキホーテ冒険お迦噺』を共訳出版しているのも，先行書の販売の好調さを窺わせる。

和田垣謙三（1860－1919年）は，明治中期から大正期にかけて活躍した経済学者で，同時に英語・英文学者，エッセイストでもあった。[3] 現在の兵庫県に生まれ，1871年にドイツ語の学習を始め，翌年に上京した後も壬申義塾（独逸学塾），東京外国語学校，開成学校などで学び続けた。ところが開成学校の語学教育の方針転換に伴い，英語に転換する。1877年に入

＊専修大学経営学部教授

学した東京大学では，経済学を専攻した。1880年に卒業した後は，イギリスのロンドン大学とケンブリッジ大学に留学し経済学を学ぶが，その際，文学にも熱中し，日本の作品を英語に翻訳もしていたという。1883年にはドイツに移り，ベルリン大学で経済学を学んだという。[4] 1884年に欧州留学より帰国し，東京大学（帝国大学）の理財学担当の講師となり，経済学の教育に携わった。[5] 一方の星野久成については生没年も不明である。和田垣とは上記の共訳の他，『和英新字典：實用いろは引』（和田垣謙三，生田弘治，星野久成共著，東華堂書店，1908年）等を編纂している。英語関係の著作も多く，英語教育に携わっていたことが分かる。『ユーズ・オブ・ライフ全譯講義』（星野久成著，1926年，原著は Lord Avebury）の巻末に掲載された『新武英和辭典』の広告には，「國民英學會講師　マスター・オヴアーツ　星野久成先生新著」とあるため，1926年には國民英學會（1888年に設立）に勤務していたことが分かる。

1．翻訳の底本

ドイツ語能力に関しては，星野の方は不明だが，和田垣は「ドイツ滞在中の様子はよくわからない」[6] とはいえ，学習歴が長い。ケンブリッジ滞在時にはキリスト教の洗礼を受け，帰国後に番町教会でドイツ語の通訳を務めていたというから，[7] 相応の語学力を備えていたはずである。では和田垣が主導してオリジナルのドイツ語からグリム童話を翻訳したのだろうか。ここで注意しなければならないのは，『家庭お伽噺』の扉（標題紙）に印刷された“Grimm’s Fairy Tales”というアルファベット文字である。巻頭の「緒言」にも，「有名なる獨逸のグリム兄弟のお伽話（フェリーテールス）（ママ）中より，最も興味多く且有益なる種類を撰抜し」（1頁）[8] たとある。「お伽話」のルビが「フェリーテールス」となっているのも，底本として英語訳が用いられた可能性を示唆している。実際に，明治期のグリム童話翻訳は，英語

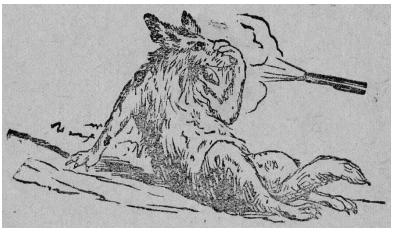

図１　画家名明記なし「狼と人間」
『家庭お伽噺』（筆者蔵）

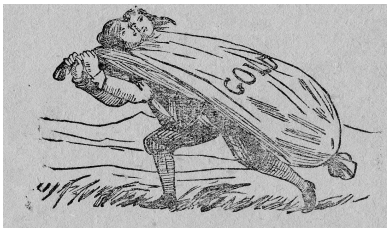

図２　画家名明記なし「鳥娘」
『家庭お伽噺』（筆者蔵）

版をもとに行われた場合が少なくなかったのである。

これまでの研究では，挿絵が手掛かりとなり翻訳の底本が判明したケースがあった。『家庭お伽噺』には，モノクロの本文挿絵（カット）が４枚掲載されている　（紙幅の関係でそのうち２枚のみを図１，図２として掲載する）。この４枚は全てウェーナート　（Edward Henry Wehnert 1813－1868年）がグリム童話の英語訳のために描いた挿絵に酷似している。

ウェーナートの挿絵付きの版は，19世紀にイギリスで刊行された有名な英語訳グリム童話の一つである。初版は“Household Stories”というタイトルで，1853年に出版された。翻訳者名が不明なため，本稿では以下「ウェーナート版」と略記する。挿絵画家のウェーナートに関しても，生没年以外の詳細は明らかになっていない。ところがこれは，日本の初期のグリム童話の受容にとっては重要な版なのである。先行する『西洋妖怪奇談』（澁江保訳，1891年）はこれを底本としており，そこにはウェーナートの挿絵を模倣した絵も掲載されているからだ。[9] さらに最近の府川源一郎の研究により，『教育雑誌』（贊育社）にも既に1887年に17回にわたって15話のグリム童話が掲載されており，そのうち13話にはウェーナートの挿絵が添えられていることが明らかにされた。[10] 本稿図１の挿絵は『教育雑誌』の第23号（1887年）にも挿絵として一足先に掲載されていたわけである。

では，『家庭お伽噺』の４枚の本文挿絵は，翻訳の底本がウェーナート

図３　画家名明記なし「大膽な男」『家庭お伽噺』（国立国会図書館蔵）[11]。絵の下に「大膽な男と熊」のキャプションがある。

版であることを示唆しているのだろうか。そう推断するには看過できない点が二つある。一つには，『家庭お伽噺』の扉の“Fairy Tales”という英語である。というのは，ウェーナートの挿絵の付けられた英語訳は“Household Stories”というタイトルで刊行されており，筆者が入手した版[12]には，扉にも表紙にも“Grimm's Household Stories”と書かれているのみで，fairy tales という言葉はどこにも見られないからである。もう一点は，『家庭お伽噺』の巻頭にある２枚のカラー口絵である。そのうちの一枚を図３として掲載する。この２枚は同じ画家が描いているようにみえるが，ウェーナートの画風とは明らかに異なっている。『家庭お伽噺』には２枚の口絵と４枚の本文挿絵があるのだが，挿絵画家に関する情報は一切明記されておらず――これは，当時は珍しいことではないが――モノクロの本文挿絵（図１，２）が，ウェーナートのものであることも明記されていない。では，巻頭の２枚のカラー口絵は日本の画家が描いたものなのだろうか。図３は「大膽な男」（KHM 114）[13]の挿絵で，詳細に観察すると，樽の手前に「万力」（Schraubstock）が描かれている。これはグリム童話では熊を押さえ

つける道具として使われているのだが，『家庭お伽噺』の翻訳テクストでは胡弓を聞いて熊が一晩中踊り続けるため，この道具は出てこない。邦訳テクストを読んで描いたのだとすれば，図3に「万力」が描かれているのは不自然である。ここでもやはり西欧の挿絵が利用されているのだろうか。そうだとすれば，その挿絵の出典は何であるのか。この二点については本稿第3節で考察する。

次節では，翻訳テクストから『家庭お伽噺』の底本を探る。19世紀の英語訳グリム童話は，必ずしも忠実な翻訳となっていないため，重訳テクストにも英語版の特徴が残り，それが手掛かりとなるのである。

2．翻訳テクストの特徴

最初に「鳥娘」（本稿図2参照）を見てみよう。これはグリム童話の【フィッチャーの鳥】[14]（KHM 46）の翻訳で，魔法使いの男が物乞いの姿で家々を訪れては美しい娘をさらう話である。ドイツ語では，娘をKötze（背負い籠）に入れて運ぶ。最後（三番目）にさらわれた末娘は，姉ふたりを救い，Korb（籠）に隠し入れて，魔法使いの男に結納の黄金だと信じ込ませて実家まで運ばせる。Korbも男が背負っており，ここではKötzeと同様のものを指すとみられる。一方で，和田垣らの翻訳では，さらう時も，姉らを実家まで運ぶ時も「袋」が用いられている。ドイツ語版の『グリム童話集』の挿絵で確認すると，娘をさらう場面は，スレーフォークト（Max Slevogt 1868－1932年）やユットナー（Franz Jüttner 1865－1926年）らが描いている。スレーフォークトの図4では籠に見える。ユットナーによる図5では，木製のように見えるが，袋でないことは明らかだ。姉らを運ぶ場面はグロート＝ヨハン（Philipp Grot Johann 1841－1892年）が描いている。図6にも，やはり籠が描かれている。中に姉たちが潜んでいることに魔法使いの男は気づいていないが，読者には分かるように，籠の中から

図４　スレーフォークト画【フィッチャーの鳥】（筆者蔵）

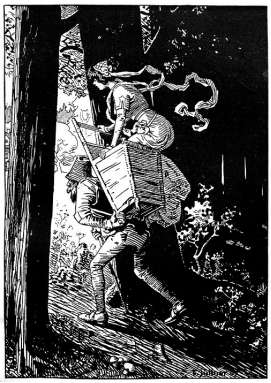

図５　ユットナー画【フィッチャーの鳥】（筆者蔵）

女性が顔をのぞかせている。このように，ドイツ語版では籠であるが，英語訳ではどうであろうか。

1909年以前に刊行された主な英語版を見てみると，テイラー（1823/26年）[15]，ポール（1868，72年）[16]，クレイン（1882年）[17]，ルーカス（1900年）[18]は【フィッチャーの鳥】を訳出していない。デイビス（1855年）[19] は，Kötze を bag，Korb を basket とし，ハント（1884年）[20] はどちらも basket と翻訳している。sack としているのは，ウェーナート版である。

グリム兄弟によるオリジナル（以下「グリム版」と略記する）では，姉ふたりは殺害され身体をバラバラに切断されるが，末妹の機転により生き返る。デイビスとハントは，ここも比較的忠実に英語に翻訳している。一方で，和田垣らのテクストでは，部屋に閉じ込められるだけで殺害されてはいない。これも，ウェーナート版のテクストと一致しているのである。[21]

同様にウェーナート版が底本であることを示す例が多数あるが，そのうち重要なものを紹介する。

【蛙の王様　または鉄のハインリヒ】（KHM 1，以下【蛙の王様】と略

図6　グロート＝ヨハン画【フィッチャーの鳥】（Freyberger 蔵）[22]

図7　ウェーナート画【フィッチャーの鳥】（筆者蔵）

す）　では，泉の中に落ちた姫の鞠を，蛙が拾ってくる。約束を守らずに立ち去った姫を追いかけて，蛙は城に行き，次のように言う。（グリム版）「昨日冷たい泉の水のそばで私に言ったことをお忘れですか」（S. 31，第6版 Bd. 1，S. 3[23] 下線は筆者による。以下同様）。和田垣らの翻訳「蛙の王様」には，「菩提樹のかげの御約束はお忘れか！」（49頁）とある。グリム版で泉のそばの菩提樹が言及されるのは話の冒頭のみで，ここには出てこない。ところがウェーナート版には，“Thy promises made / At the fountain so clear / ’Neath the lime-tree’s shade”（S. 2）とある。

【森の中の三人の小人】（KHM 13）の意地悪な継母は，紙で洋服を作り継娘に着用させ，雪の積もる森で苺を摘んでくるように言いつける。紙らしく描いた挿絵のうち，際立っているのがドイツのグロート＝ヨハンによる図8である。ネックラインに描かれた Zeitung（新聞）という文字が素材を明示している。冬の森に行かせるのに，袖なしの服を与えるだけでも十分に酷いが，新聞紙を利用していることが，継母の意地悪さを一層強調している。ところが，和田垣らの「森の小人」の継母は，「紙の外套をこしらへ」て継子に着せている。「外套」としたのは，邦訳者が寒さをやわらげようとしたのではない。ここもウェーナート版の“paper cloak”によるとみるべきだろう。

【牧童】（KHM 152）は，難問と当意即妙な答えの話である。類似の話

図８　グロート＝ヨハン画【森の中の三人の小人】（Freyberger 蔵）

はヨーロッパのさまざまな地域で語られており，国際昔話話型 AT 922番「僧の代わりに王の質問に答える羊飼い（王と修道院長）」[24] とされる。問いの一つは「天にある星の数」で，答えとしては「袋の中の砂粒の数だけ」「木に付いている葉の数だけ」などが知られている。この問いに対して，和田垣らの「奇問奇答」の童は，「懐より紙を出して，これに針で無数の穴をあけ」（331頁）て，その穴の数だけ存在すると答えている。グリム版を確認すると，「ペンで細かい点を打つ」（S. 680，第６版 Bd. 2 S. 324）とあるのみで，穴を開けてはいないことが分かる。ここもウェーナート版の “he made in it with a pin so many minute holes”（S. 433）と一致する。ただし，下線部のように童が懐から紙をとり出すのは，邦訳での変更点である。ウェーナート版では，少年は大きな紙を所望しており，その部分はグリム版をほぼ忠実に翻訳しているからだ。

その他，「三つの願」（KHM 87）や「麦の穂」（KHM 194）において，「神」が「天使」と翻訳されているのも，ウェーナート版の angel に依拠していると考えるべきだろう。

3．英語訳グリム童話「ウェーナート版」

前節で指摘した一致点は，『家庭お伽噺』の底本がウェーナート版だということを指し示している。しかしながら，第1節で指摘した通り，看過できない点もあるため，ウェーナート版を再調査し，いくつかの版を新たに入手した。Zirnbauer による先行研究では，ウェーナートの挿絵付きの英語訳は4種類確認されている。[25] 初版は，“Household Stories”というタイトルで1853年に出されたもので，全2巻計864頁であった。これを552頁の一巻本にまとめたものが，同タイトルですぐに刊行された。これには刊行年の明記はないが，Zirnbauer は1857年と推定している。筆者蔵もこれの再版で，初版の各話の後のスペースが削除されているため552頁に圧縮されていることが確認できる。1890年には“Household Fairy Tales”というタイトルで334頁からなる選集版が刊行された。この他，刊行年がないもので，“Grimm’s Fairy Tales”というタイトルで507頁の版が，ロンドンの The Standard Library から出された。以上が Zirnbauer の言及する4種類の版である。4番目の“Grimm’s Fairy Tales”は，タイトルが『家庭お伽噺』の扉の文字と一致する。このリプリント版[26] を入手し確認したところ，ここには，552頁の版のテクストは全て収められている。挿絵は，フルページの別刷りは一枚もなく，モノクロの本文挿絵も一部しか掲載されていないために頁数が削減されている。ただし，『家庭お伽噺』に利用された4枚の本文挿絵は全て掲載されている。そのため，底本としてこれが使われた可能性も排除できないが，カラー口絵（図3他　計2枚）の出自は不明のままである。そこで，“Grimm’s Fairy Tales”というタイトルの英語版の古書を探し，もう一冊を入手したところ，これが前述の4種とは異なる版であった。[27] ここに収められている本文挿絵とモノクロのフルページの別刷りは，全てウェーナートによるもので，552頁からなる

図９　画家名明記なし【森の中の三人の小人】“Grimm’s Fairy Tales”（筆者蔵）

“Household Stories”と同じものである。テクストも同様に全てが収められている。これに加えて，ウェーナートとは明らかに異なる筆致の画家不明のカラー挿絵が12枚，フルページの別刷りで折り込まれている。そのうちの２枚が，『家庭お伽噺』の巻頭口絵の２枚と一致するのである。図３は，キャプション以外は図９に酷似している。図３の万力もこれに由来することが分かる。

以上の考察より，『家庭お伽噺』の底本は“Grimm’s Fairy Tales”というタイトルのウェーナート版で，フルページの別刷りカラー挿絵が12枚（図９他）添えられた552頁の版だと考えられる。この12枚は全て同一の画家が描いたとみられるが，名前などは一切不明である。この版の扉には“Being the Household Stories Collected by the Brothers Grimm”とあり，邦訳タイトルの『家庭お伽噺』にあたる“Household Stories”という言葉も印字されている。

4．和田垣・星野の翻訳テクストの特徴

では和田垣と星野は，ウェーナート版テクストを忠実に翻訳しているだろうか。『家庭お伽噺』の編集方針について「緒言」にはこうある。「有名なる獨逸のグリム兄弟のお伽話（フェリーテールス）中より，最も興味多く且有益なる種類を撰抜し，之を吾國の子女の讀物に適する様に譯出したるものなり」（1頁）。日本の子どもたちのために彼らが英語版のテクストにどのように手を加えたかを見てみよう。

4.1. 固有名詞

1891年刊の『西洋妖怪奇談』では，ジヨン，シンドレラ，ベンジヤミンなどといった（底本にある英語の）名前が翻訳テクストでも用いられているが，『家庭お伽噺』では，名前はどれも日本風である。Rapunzel（ラプンツェル，KHM 12）という娘の名前は「光子（ひかるこ）」，Korbes（コルベス，KHM 41）という姓は「金室」になっている。どちらもウェーナート版ではそのまま保持されていたが日本風に変えられたのである。その他，Aschenputtel（灰かぶり，KHM 21）という娘の名はウェーナート版でCinderellaとなり，邦訳で「眞珠姫」となっている。

当時はヨーロッパの固有名詞は一般的に馴染みが薄かったためだろう，必要性が感じられないところでは，削除されている。料理人の女性名Gretel（ウェーナート版Grethel）は，邦訳では「お抱への料理番」とされ，性別も不明となっている（「氣のきいた料理番」KHM 77）。怠け者のハインツと妻のふとっちょのトリーネは，ウェーナート版では対応する英語名lazy Harryとfat Kateだが，邦訳ではひとくくりに「なまけ夫婦」（KHM 164）とされている。地名も同様で，「藝は身を助く」（【ブレーメンの音楽隊】KHM27）では，動物たちは特定の町（ブレーメン）を目指している

わけではない。その他，スイスという国名も，邦訳の段階で削除されている　(「犬の言葉」KHM 33)。

4.2. キリスト教

「震へる法」(KHM 4) では教会が寺に置き換えられている。当時の読者に身近でないと考えたのだろう。同じ話が『少国民』の1897年 3 月19日号に「戰慄物語」として掲載されているが，やはり「教会の塔」は「寺の鐘楼堂」となっている。一方で，先行する『西洋妖怪奇談』では，「教會の塔上に誘ひ」[28] とあり，教会という言葉が明治期にグリム童話の翻訳で全く使われていなかったというわけではない。しかし『家庭お伽噺』では，キリスト教的な要素は極力取り除かれている。

【泥棒とその親方】(KHM 68) には，冒頭で父親が教会に行き，息子に身につけさせるべき仕事は何かを神に尋ねる場面がある。和田垣らは，「或る日鎮守の神様に」(160頁) 伺いをたてることに変えている。和田垣は，ケンブリッジ時代に洗礼を受け，葬儀もキリスト教式に行わせたとのことであるから，[29] キリスト教的要素を理解しなかったわけではない。読者の理解を考えた上での編集であると考えられる。

【歌う骨】(KHM 28) では，最後に悪事が暴かれ，殺害された男の骨が橋の下から掘り起こされ，教会の墓地に埋葬される。『家庭お伽噺』の「骨の笛」では，「後生を吊ふため，立派なお寺まで建てて，或る時國中擧(こぞ)つて盛んなお祭りをしました」(22頁) という文が付け加えられた。和田垣らの翌年に同じ話を翻訳した近藤敏三郎も同様の描写を加えている。「改めて立派な塋穴(つかあな)に移し，大きなお寺まで建てて鄭寧(ていねい)に後生を吊つておやりになりました」。[30]

キリスト教的なものが取り除かれる一方で，「藁と薪と豆」(KHM 18) においては，「南無阿彌陀佛(なむあみだぶつ)，阿彌陀佛(あみだぶつ)」(153頁) という念仏が書き加えられた。これは，共に旅をしていた藁と炭が川に落ちて死んでしまった時，

豆が唱える言葉として加えられた。

4. 3. 風習

次に，家族間でのキスや，挨拶としての握手など，ヨーロッパの風習はどのように扱われているだろうか。言うまでもないが，これらはウェーナート版ではそのまま翻訳されている。

【泉のほとりの鵞鳥番の娘】（KHM 179）で末娘が両親と再会する際，首に抱きついてキスをする場面があるが，「姫の行方」では抱きつくだけに変えられている。では男兄弟の場合はどうだろうか。【技の優れた四人兄弟】（KHM 129）では，4年後の再会時に，兄弟4人は抱き合い互いにキスをしているのだが，「四人兄弟」ではこの描写は削除されている。

【泥棒の名人】（KHM 192）の冒頭で，老人が裕福な若者を握手で迎えている。「お盗棒様」では，迎える人物は「この家の婆さん」に変えられ，「平蜘蛛のやうにへたば」り，平伏して挨拶をしている。変えられたのは行動だけでなく，発話内容もである。この若者が田舎料理（邦訳では芋）を所望すると，日本の老母は「まあ，こんな，むさいところでも，ちとお上り下さいませ」（260頁）と言うが，これも翻訳者が付け加えたものである。

巻頭口絵（図3）に描かれた「大膽な男」（KHM 114）の話の最後には，結婚式が挙げられるが，これも和風に行われている。「サテお姫様とお婿様とは目出度く三々九度のお盃も済ませて，末永く幸福に世を送りましたとさ」（203頁）。

4. 4. 話の簡略化

『家庭お伽噺』では，話を大胆に短縮している場合が少なくない。ここで取り上げる例も，ウェーナート版においては概ね忠実に翻訳されているが，和田垣・星野が翻訳する際に変更しているものである。

「三つの願」（KHM 87），「悪魔の寶」（KHM 189），「大男」（KHM 90），「黄金丸」（KHM 85）などがその例だが，以下で特徴的な三つの話を詳しく考察したい。

【三つの言葉】（KHM 33）の主人公の男性は，犬，鳥，蛙の言葉を習得し，三つの言葉がそれぞれ意味を持つのだが，和田垣らはそれを犬の言葉ひとつに限り，後半を省略し，タイトルを「犬の言葉」にしている。【三つの言葉】の後半で語られているのは，主人公の男がローマに行き，その地で法王に選出されるということだ。こうしたキリスト教的な内容が，本稿4.2.の例と同様に回避されている。

【三人の幸せ者】（KHM 70）では，父親が三人の息子に遺産として雄鶏，大鎌，猫を与える。息子たちは，それらが知られていない所に辿り着き，交換により財産を築く。三男は，鼠の害に悩む島で，猫と引き換えに多くの黄金をもらう。この島に関しては，グリム版では後日譚が語られる。島の人は猫の働きぶりに喜ぶが，その叫び声を聞いて，化け物だと思い込む。そして城にいる猫を退治しようと砲撃したため，城は崩れ落ちる。一方で，猫は逃げのびている。このエピソードは，和田垣らの「三つの寶」では削除され，「しかし，鶏や，鎌や，猫はその後，何（と）うなりましたらう」（168頁）という文を追加して話を終えている。鶏と鎌の国がグリム版でも言及されていないように，邦訳では猫の国の話も削除されたのである。

「大きな大根」（【かぶ】KHM 146）で省かれたのは，ヨーロッパの挿絵画家を惹きつけた場面である。古くは1823年のイギリスのクルックシャンク（George Cruikshank 1792－1878年）（図10）から，ドイツで活躍したラインヴェーバー（Robert Leinweber 1845－1921年）やウッベローデ（Otto Ubbelohde 1867－1922年）（図11）まで，再三描いてきた。【かぶ】は二人兄弟の話で，「金持ちの方」と「貧しい方」と描写されるのみで，どちらが兄かは明記されていない。邦訳では，金持ちの方が兄と翻訳されることが多い。本稿でも便宜上，同様の区別をする。金持ちの「兄」は，巨大

図10　クルックシャンク画【かぶ】（筆者蔵）

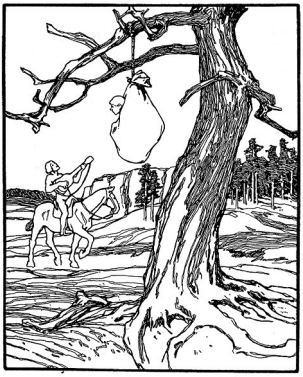

図11　ウッベローデ画【かぶ】（筆者蔵）

なかぶによってひと財産を築いた「弟」を妬む。そして殺し屋を雇い，「弟」を袋に入れて木に吊るさせる。図10と図11で，袋にこじ開けた穴から顔を出しているのが「弟」である。そこに遍歴の学生が馬に乗って通りかかる。「弟」は，これが「知恵の袋」だと偽って，学生を身代わりに袋に入れて立ち去るのである。[31]

この袋が，「知恵の袋」として昔話や古い文学にしばしばみられるモチーフであることにグリム兄弟は着目していた。彼らが『グリム童話集』の各話に付けた注釈[32]には，袋や樽に押し込まれるこのエピソードが16世紀イタリアのストラパローラの『愉しき夜』や『グリム童話集』の別の話にもあることを指摘しており，彼らがそこに注目していたことがわかる。[33] グリム兄弟の注釈からは，木にぶら下がり知恵を獲得するという箇所に，さらには北欧神話のオーディンを重ね合わせていたことも分かる。[34] こうしてグリム兄弟がヨーロッパの伝承とのつながりや神話的な要素を見出していた後半部は，ウェーナート版では保持されたが，『家庭お伽噺』では完全に削除された。そのうえ邦訳では「兄」の人物像もかなり変えられた。最後に「兄」は「思ひがけない生恥をかいて，以後は大(おほい)に心をあらた

め，軍人の身にあるまじきさもしい心をすてて，忠勤をはげみ，弟とも仲なほりをして，立派に身を立てた」(213頁) とある。翻訳者らは，「兄」の性格を変えることも厭わなかったのである。

4.5. 解説

こうした変更には，教訓的な意図が込められていたようだ。それは邦訳の各話の終わりに付けられた「解説」から読み取ることができる。「大きな大根」の解説にはこうある。「この兄のやうに慾張つた卑しい心を持つと生耻(いきはぢ)を掻きますし，彼の弟のやうに正直律儀の心を持てば，恩恵(めぐみ)を受(うけ)るやうになります。又徳孤(とくこ)ならず必ず隣(となり)ありとか申しまして，一人の善人があると他人も之(これ)に感化されます，この兄も後に過失(あやまち)を悟(さとつ)て心を改めた點(てん)は大に感心な事で，誰もかく有りたきものです」(213頁。下線は筆者による)。原作では改心するどころか，刺客をさしむけていることは前項で述べた通りである。下線部は翻訳者の加筆によって生み出されたものである。

「骨の笛」(KHM 28) の解説では，手柄を横取りするために弟を殺害した兄 (この話ではこちらが年上との明記がある) が，最後に罰せられることを次のように評している。「悪い事はどんなに巧(うま)く隠したつもりでも，天知る，地知る，吾知るとて，遂に露現するものです」(22頁)。こうした勧善懲悪の教訓は類似のものになりがちで，よく似たものが前述の近藤敏三郎訳「物言ふ骨」にもみられる。「皆さんが歴史を御覧になつても，昔から悪事陰謀を働らいて，しまひまで露現せずに居た例はありますまい，諺にも『天知る地知る人知る』とて，悪るい事の末まで知れんですむ筈はないのですから，人は正直にして世を渡らねばなりません」(20頁)。一方で，それぞれに異なった教訓を垂れている場合もある。【ブレーメンの音楽隊】で比較してみよう。

和田垣・星野訳（ロバは「馬」と翻訳されている。）

此噺の中の馬と犬と猫と鶏はみんな役に立たぬと主人に棄てられたものですが，それでも皆々一致して仕事をやつたら旨く行きました，人間も自分丈で出來ぬ事でも，多勢と一致してやれば，首尾よく仕遂げられる場合が幾等もあります。（13頁）

近藤敏三郎訳　（ロバは「うさぎうま」と翻訳されている。）

西洋の格言に，『天は自から助くる者を助く』といふのがありますが，實にその通りで，どんな九死一生の目に遇つても，驢のやうに少しも落膽しないのみか，未來の方法を立てますと，又自から道が開けるものです，皆さんも苦しい事や，悲しい事にあつても，氣息のある内は前途もあるものと思つて，決して自分から自分を捨てるやうな事があつてはなりません。（10頁）

教訓を付け足すのは，何も日本の翻訳者に限ったことではない。1837年のポルトガル語訳の教訓は，「手をとりあって協調できる者は，いつも幸せに贅沢な暮らしができる」[35] で，和田垣・星野のものに近い。

次に前項で言及した「三つの寶」の解説を見てみよう。雄鶏，大鎌，猫で財産を手に入れる話である。「どんな物でも，それぞれ用い様に依て役に立ちますから，世の中に廃れ物はありません，又少し許りの資本でも，巧く運轉すれば大儲をするやうになれます」（169頁）。こうした「儲け」に言及して若者を鼓舞するような内容は，経済学者としての和田垣の特色かもしれない。

和田垣・星野による解説では，教訓を垂れるだけでなく，日本の昔話やイソップ，シェイクスピアとの共通点にも言及している。例えば「姫の行方」がシェイクスピアの『リア王』に似ていることである。和田垣は文学も愛好しており，大学時代には『リア王』を『李王』のタイトルで漢訳し

ていたという。[36]

4.6. 変えられた話

【金の鍵】（KHM 200）では，雪の中で金の鍵を見つけた少年は，錠前もあるはずだと思い，地面を掘って探すと，鉄の箱が見つかる。この箱は金の鍵で開くが，「私たちは少年が蓋を開けてしまうまで待たなくてはなりません。そうすれば中にどんな素晴らしい物があるか分かるでしょう」（S. 842，第 6 版 Bd. 2 S. 540）という言葉で話が終えられている。箱に何が入っているのかは読者の想像にゆだねられているのだ。邦訳でタイトルが「孝行の徳」となっていることは，話が変えられたことを暗示している。もともと少年は貧しいと規定されているのみで，「孝行」としたのは和田垣らである。原作では，明らかにオープンエンディングの話であり，グリム兄弟は初版の時点からこの話を常に童話の最後に配置し（第 7 版では200番），読者に続きを任せる形で終えている。一方で邦訳者は，話の最後に「なんでもこの子は，その後，村中一番の福々長者になつたと云ふことをききました」（259頁）という一文も付け加えて明らかなハッピーエンドとしている。その意図は，「解説」に示されている。「親孝行の者には早晩必ず天より幸福を授けられます」（259頁）。子どもが孝行であることを邦訳者は期待していたようで，他にも「恵みの肉汁」（KHM 103）の少女も孝行娘とされている。

「百姓と子供」も大きく変えられた。可哀想な孤児（グリム版では羊飼いの子）は預けられた家で情け容赦なく働かされる。失敗を重ねて，叱られるのを恐れ，「毒」を飲んで死のうとする。ところが実際に入っていたのは，蜂蜜とハンガリーのワインである。【墓の中のかわいそうな少年】（KHM 185）という原題が暗示しているように，この少年は酔ったまま死んでしまう。意地悪な夫婦は，出火により家が火事で燃えてしまい，みじめな終わりを迎えている。ウェーナート版ではおおすじで忠実に訳されて

いるのに対し，和田垣らの翻訳では，蜂蜜とワインのおかげで少年はかえって元気になり，意を決して逃げている。一方で，この子に辛くあたった百姓夫婦は，そのことがお上に知れ，財産などを没収され，他人の裁きを受けている。和田垣らが付けた「解説」には，翻訳者の勧善懲悪的な意図が示されている。「金持でありながら吝嗇（けちんぼ）で，可哀想な小供を憐れまずに，却て虐（むご）くこき使ふやうな人悲人が，お上から罰を受けたのは善い気味で當然（あたりまへ）の事です」（257頁）。

【貧乏人と金持ち】（KHM 87）では，神に頼むべき三つの願い事を金持ちの男が思い悩む場面が詳しく描かれる。バイエルンの農夫なら迷わずビールを頼むのに，などである。結局のところ，吝嗇な金持ちの男はくだらない願い事で機会を無駄にしており，笑い話的な要素が前面に押し出されている。これに対して邦訳「三つの願」では金持ちの男が悩むエピソードが省かれ，彼の吝嗇が戒められ，正直者が報われる話に単純化されている。解説の「日本の舌切雀や，花咲爺の噺のやうに慾張者を戒めたもの」（179頁）にその意図が示されているが，これには，バイエルンの農夫やビールというイメージが当時の日本では伝わらないという理由もあっただろう。

本節の最後に，さらに三つのグリム童話を例として紹介する。これらは現在では良く知られている話で，和田垣・星野が大胆に手を加えたことに驚かざるを得ない。

4. 6. 1.「蛙の王様」（【蛙の王様】KHM 1）

「蛙の王様」で，泉の中から金の鞠を拾ってくるかわりに，蛙が姫に要求する条件はこうである。「この私を，お姫様のお友達にして，御飯まで，一つお膳で一所にいただけるやうにお願ひ致します」（47頁）。グリム版では「あなたの小さなベッドで寝させてくれるなら」という条件も含まれていた。これは，ウェーナート版でも保持されたが，和田垣らが削除したのは，子どもには不適切だと考えたためだろう。[37]【蛙の王様】で蛙が王子

の姿に戻ることができるのは，最後に姫が蛙を壁に投げつけたからである。恩のある蛙を投げつけるには，それ相応の理由が必要となる。グリム版では，姫のベッドに上げるよう蛙が要求することが引き金となるが，そこを削除した邦訳では，変更の必要に迫られたようだ。蛙は約束にはない「抱つこして頂戴」(50頁）という要求をし，姫を怒らせるのである。投げられて無事に元の姿になった王子は，グリム版では，自分を救うことができたのは姫だけだったと伝えているのみである。『家庭お伽噺』の王子はこうも言っている。「それで，おいやなのも知りながら，無理に得て勝手なことを申上げた次第であります。無禮(ぶれい)のかどは幾重にも御詫びを致しまするし，命を救つて下すつた御手柄には，また重ねて心から御禮(おれい)を申します」(51－52頁)。このように，非常に丁寧に礼を述べている。原話では約束したことを要求しただけだが，邦訳では「抱つこ」という「無理に得て勝手な」をことを突然言ったため，それに見合った謝罪をしているということでもあるのだろう。一方で姫も，邦訳ではより礼儀正しく行動している。蛙が鞠を拾ってきた後，姫が約束を無視して，蛙を置き去りにして城に帰る場面には，下線部が追加されている。「有難うと云ふが早いか，一目散に逃げて來ました」(47頁)。礼も言わずに立ち去るのは無礼極まりないという，教訓的配慮が感じられる。

4.6.2.「赤帽さん」(【赤ずきん】KHM 26)

「赤帽さん」も非常に孝行な娘にされた。祖母への「今までの恩返しに，毎日々々一里も二里も先きのお醫者(いしゃ)の所へ，お薬を取りに行つたり，何か美味いものを買ひに出かけ」(53－54頁）ているからだ。グリム版の祖母は森で一人暮らしをしているが，「赤帽さん」では同居のようだ。独居だとの記述はなく，赤帽が祖母のいる家に着いた時にも「ただいま」と言っているからだ。病気の祖母に森で一人暮らしをさせるのは理解しにくいためだろう。[38] グリム版では，狼が娘に声を掛けるのは，祖母の見舞いに

行く途上である。邦訳でも一人で出かける必要があり，医者への遣いや買い物に行くことにしたようだ。「赤帽さん」の一番の特徴は，赤帽が狼に食べられて話が終わっていることだ。つまり赤帽も祖母も助からないのである。グリム版では，猟師が登場し，狼の腹を切り裂くと，二人が中から無事に出てくる。ウェーナート版では，猟師が狼を鉄砲で撃ち殺したところで話が終わっており，赤ずきんらは救出されていない。[39]「赤帽さん」では，狼が撃たれる場面も削除されている。娘らが救出されないのであれば，狼が殺害されるか否かは重要でないと考えたのだろう。邦訳では住居が「森の中」にあるという記述もなく，「猟師」が通りかかるのも不自然である。このように，辻褄を合わせたと思われる工夫も随所にみられる。【赤ずきん】では，赤ずきんと狼の間で有名なやりとり――「なんて大きな口をしているの」「おまえが食べやすいようにさ」――などが交わされるが，これはウェーナート版では保持されているものの，邦訳では削除されている。話を簡略化したとも考えられるが，同居して毎日顔を合わせている祖母に対する問いかけとしては不自然だと考えた可能性もある。

4. 6. 3.「光子」（【ラプンツェル】KHM 12）

【ラプンツェル】の冒頭で母親が無性に欲して，サラダにして食べているのは，（一般名詞の）Rapunzel である。これは Feldsalat ともいい，ドイツではサラダ菜として広く食べられている。英語では corn salad だが，Sutton によれば当時はサラダ菜として食べることはなかったという。[40] ウェーナート版では radish と翻訳され，和田垣らはそれを「葱や菜葉」とした。邦訳ではこれを「三杯酢」で日本風に食べているだけでなく，原作のように妊娠中の妻が一人占めするのではなく，夫婦二人で食べている（132頁）。

他の話においては，簡略化される傾向が顕著だが，「光子」においては，翻訳者によって多くの加筆が行われている。ラプンツェル（＝光子）は魔

女に連れ去られ，窓が一つしかない塔に閉じ込められる。魔女自身も王(子)も，ラプンツェルの長い髪をつたって登らねばならず，その様子は挿絵にもしばしば描かれている。ところが，最初に魔女はどのようにしてラプンツェルを塔へ閉じ込めたのか，また，追放する際にどのように魔女はラプンツェルを塔から連れ出したのかに関しての描写はない。マックス・リューティが指摘するヨーロッパの昔話の文体は，そうした説明を必要とせず，聞き手も不思議に思うことはない。一方で『家庭お伽噺』の魔女は，光子が王と密会していることを知った後はこのように行動している。「光子の長い長い髪の毛を，ヅブリヅブリと切り落し，是を窓の戸に確(しつか)り結びつけておいて，『さあ，お出で』と，光子を抱いて塔を降り，東西南北，縦横無盡に引きつれ廻つた揚句のはてに，とある廣々とした荒野原の中に光子を棄てて，自分だけ以前の塔へかへつて來ました」(140頁)。このように詳しく描写されるが，グリム版ではラプンツェルの髪の毛を切り落とした後に荒れ野へ追放したとあるのみで，どのように塔から出たのかの説明はなく，魔女は連れ回してもいない。「光子」では，総じて描写が増えており，王の様子も詳しく語られる。王は，塔から落ちた際に茨に目をつかれて目が見えなくなるが，そこで「地踏駄ふむで怨み」，その後「痛む眼を抑(おさ)へながら，悔し涙に鬼婆を恨み，いとし戀(こひ)しと姫にあこがれ，手さぐりに木の實を拾ひ，木の根を堀り，それで漸く命をつなぎながら」(143－144頁）さまよい歩いている。これらも「光子」で加筆された描写である。その後，二人がめぐり合い，光子の涙により王の目が再び見えるようになるのは原作通りであるが，ここでも翻訳者たちは雄弁に物語っている。

不思議や王様の眼は，パチリと開きました。

見ると，今まで長の年月，戀(こ)ひこがれて居た光子姫。

しかも姫には，昔しの色香どこへか失せて，やつれはてたる御有様。

王様は，泣きくづれた姫の姿を，じつと御覧になつて，嬉しいやら，

悲しいやら，なんと言葉も泣くばかり。（144－145頁）

リューティの理論を持ち出すまでもなく，昔話には時間を超越した語りがあり，長期間ガラスの柩の中に横たわっていても（【白雪姫】KHM 53），7年間真っ暗な塔に閉じ込められても（【マレーン姫】KHM 198）美しい姫の色香が褪せることはない。少なくともそれが描写されることはないのである。一方の「光子」では，王と姫が再会するまでの期間は「5年」とされる（グリム版では数年である）が，ならば百年もの間眠っていた「いばら姫」に対して和田垣らはどのような辛辣な描写をするかが懸念されるが，残念ながら【いばら姫】（KHM 50）は訳出されていない。本項の引用にあるような現実的な描写は，全体をユーモラスにしてしまうが，それも翻訳者の望むところなのだろう。

おわりに

ウェーナート版を日本語に翻訳する際に，和田垣・星野が話をどのように改変したのかを本稿では考察してきた。大胆に簡略化する傾向があり，「眞珠姫」（灰かぶり）　が舞踏会を訪れるのが三回から一回にされていたり，動物の言葉が三種類から一種類だけに省略されていたり，ヨーロッパの昔話が好む三回の繰り返しを無視した形での変更も目に付く。「光子」での加筆は，ヨーロッパの昔話の文体にはそぐわない描写である。

他方で，読者である子どもたちには孝行であることを期待しているようだ。孝行が報われる形で【金の鍵】が変更されているなど，話の筋も変えることも厭わず，教訓色を強めている。

それでも教訓を目的とした退屈な話になってしまったわけではない。テクストの中に垣間見える翻訳者らのユーモアと，講談のような調子のよい語りが，楽しい読み物にしている。さらに，ポックリ出合う，ザンブと跳

びこむ，エッチラオッチラ歩く（19，90，229頁他）など，擬音語・擬態語も多用されている。「狐と鴨」（KHM 86）では，鴨を食べようとする狐が言うのは「さあ尋常に覚悟いたせ，拙者の腹を墓場と合點（がってん）しろ」（191頁）という生きのいい台詞である。その他にも「百姓と小供」では，原話では墓で死んでしまう少年が，逃げのびることに変えられていることは，本稿で指摘した通りである。そこの描写はこうである。「男一匹と生まれた身の，ムザムザ百姓一匹のために，命の安賣（やすうり）は出來ないと悟つて，そのまま何處（どこ）へか逐電しました」（256頁）。このように威勢の良い文章や，ユーモラスで楽しい箇所が読者を惹きつけたのではないか。何度も版を重ねた『家庭お伽噺』は，日本におけるグリム童話の受容にも影響を与えたのだが，これに関しては稿を改めて論じたい。

本稿は，平成28年度専修大学研究助成「グローバル化した『グリム童話集』の翻訳にみる異文化受容」の研究成果の一部である。

注

1　西口拓子「英語訳グリム童話のグローバルな影響について――エドガー・テイラー訳の場合」『現文研』第92号，専修大学現代文化研究会，2016年３月，45－55頁。

2　中山淳子『グリムのメルヒェンと明治期教育学』臨川書房，2009年，117頁。

3　和田垣については以下の論文に詳しい。三島憲之「和田垣謙三と明治・大正期の経済学界（I）和田垣の経歴と活動を中心に（１）～（３）」『東北公益文科大学総合研究論　集 forum 21』（１）2002年４号，27－50頁。（２）2003年５号，143－165頁。（３）2004年７号，73－94頁。

4　三島 2002年，43頁。

5　東京大学で経済学担当の「専任」の日本人教官としては，和田垣が最初であった。日本人では田尻稲次郎が最初だが，彼は大蔵官僚のまま嘱託講師として勤めていたためである（三島 2003年，143－144頁）。

6　三島 2002年，44頁。

7　植田敏郎『巌谷小波とドイツ文学』大日本図書，1991年，491頁。

8　本稿での引用は，和田垣謙三・星野久成訳『グリム原著　家庭お伽噺』（第18版，小川尚栄堂，1919年）による。本書からの引用時は頁数のみを明記する。なお本稿での引用時には，「々」以外の踊り字は使用しない。

9　西口拓子「澁江保訳『西洋妖怪奇談』の挿絵と底本について――挿絵からみた明治期グリム童話翻訳」。『専修人文論集』第92号，専修大学学会，2013年，143－164頁。

10　府川源一郎「『教育雑誌』に翻訳されたグリム童話」『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第28号，2015年，１－13頁。府川源一郎氏には『教育雑誌』の中に新発見された貴重な資料を披見させていただき，感謝申し上げる。

11　筆者が購入した『家庭お伽噺』（第18版，1919年）は，古書のため二枚目の口絵と扉が欠落している。図３は国立国会図書館の蔵書（明治42年初版）による。

12　筆者が入手したのは以下の版である。Household Stories. Collected by the Brothers Grimm. With Two Hundred Illustrations by E. H. Wehnert. And Thirty-Two Pages of Coloured Plates. London. George Routledge and Sons. Broadway, Ludgate Hill. New York. 刊行年は明記されていないが，推定1900年前後のものである。552頁からなる一巻本で，別刷りされたフルページの挿絵は，いずれも彩色されている（本稿第３節参照）。本稿でのウェーナート版からの引用はこの版により，頁数のみを明記する。

13　慣例に従い，『グリム童話集』（Kinder- und Hausmärchen）の各話に，第７版（1857年）での収録番号を KHM とともに示す。テクストは，Rölleke, Heinz（Hrsg.）: Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand. Stuttgart（Reclam）2003 および Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 6. Aufl. 2Bde. Göttingen 1850. を参照した。日本語訳は以下を参照した。野村泫訳『完訳グリム童話集』全７巻，ちくま文庫，2005－2006年。

14　本稿では，明治期の邦訳タイトルと区別するため，『グリム童話集』でのグリム兄弟によるオリジナルのタイトルの和訳は【　】で示す。

15　Taylor, Edgar（transl.）: German Popular Stories, London, vol.1 1823, vol.2 1826. クルックシャンクの挿絵が付けられている。西口 2016年参照。

16　Paull, Mrs. H. B.（transl.）: Grimm's Fairy Tales. A New Translation. London. 刊行年は1868年もしくは1872年と推定されている。

17　Crane, Lucy（transl.）: Household Stories from the Collection of the Bros: Grimm. Translated from the German by Lucy Crane and Done into Pictures by Walter Crane. London 1882.

18　Lucas, Mrs. Edgar（transl.）: Fairy Tales of the Brothers Grimm. London 1900.

19　Davis, Matilda Louisa（transl.）: Home Stories, collected by the Brothers Grimm, Newly Translated. London 1855.

20　Hunt, Margaret（transl.）: Grimm's Household Tales. With the Author's Notes. Translated from the German and edited by Margaret Hunt. 2 vols., London 1884.

21　先行する『西洋妖怪奇談』では，「羽郷の處女」がこの話を翻訳したものだが，同じくウェーナート版を底本としているため，姉ふたりは殺害されていない。さらにウェーナートの挿絵（図７）を模倣した挿絵も掲載された（西口 2013年参照）。

22　Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Mit Illustrationen

von P. Grot Johann und R. Leinweber. Stuttgart u.a. 1893. 本稿のグロート＝ヨハンの挿絵は全て Regina Freiberger 氏の個人蔵による。

23　ウェーナート版の特徴から，『グリム童話集』の第 6 版（1850年）を底本としたとみられる（西口 2013年参照）。本稿では，グリム兄弟が手掛けた最後の版である第 7 版（1857年）の他に，第 6 版も参照している。重要な箇所には第 6 版の頁数も示す。

24　アールネが作成しトンプソンが改訂した話型番号。Thompson, Stith: The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography. Helsinki [4]1981.（FFC No.184）現在はドイツのウターによる改訂版（2004年）がある。

25　Zirnbauer, Heinz: Grimms Märchen mit englischen Augen. In: Brüder Grimm Gedenken. Bd. 2. Marburg 1975, S. 203-245.

26　Nabu Public Domain Reprints. Bayerische Staatsbibliothek München の蔵書印がある。

27　Grimm's Fairy Tales. Being the Household Stories Collected by the Brothers Grimm. With two hundred Illulstrations by E. H. Wehnert. London George Routledge & Sons. New York: E. P. Dutton and Co.（刊行年は明記なし）

28　澁江保訳『小學講話材料　西洋妖怪奇談』1891（明治24）年，博文館，73頁。

29　三島　2004年，89頁。

30　「物言ふ骨」。近藤敏三郎訳『新譯解説　グリムお伽噺』精華堂，1910年，19頁。以下，引用時には頁数のみを挙げる。

31　第 5 版までは，それで話は終わっていた。第 6 版から「それでも一時間後には，人をやって，学生をまた下ろしてやりました」という一文が書き加えられた。ウェーナート版にこの一文が訳出されていることも，底本が第 6 版であることを示している。

32　グリム兄弟による注釈は，『グリム童話集』の第 3 巻に収められている。本稿では以下の版を参照した。Rölleke, Heinz（Hrsg.）: Brüder Grimm. Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen. 3 Bde. Stuttgart 2010.

33『愉しき夜』第一夜第二話「カッサンドリーノ」では，「天国に行くことができる」と神父が騙され袋に入れられて，連れ去られている。(『愉しき夜』長野徹訳，平凡社，2016年所収)。グリム童話【小百姓】（KHM 61）では，樽に入れられて殺されそうになった男が，この樽に入れば村長になることができると言って羊飼いを騙して，身代わりにしている。

34　Rölleke 2010, Bd.3, S. 251.

35　Cortez, Maria Teresa: Zur Rezeption der Kinder- und Hausmärchen in Portugal. In: Jahrbuch der Brüder Grimm-Gesellschaft. Bd. 6, Kassel 1996, S. 127-142, hier S. 134.

36　三島　2002年，38頁。日本英学史学会編『英語事始』（エンサイクロペデイアブリタニカ，1976年）によれば，漢文で完訳し明治12年に出したという。(259頁)

37　Röhrich, Lutz: Wage es, den Frosch zu küssen. Köln 1987. 32頁参照。

38　これは韓国での初期のグリム童話翻訳にも共通している。1923年の翻訳では，祖母

と赤ずきんはやはり同居している。祖母が次男の家に滞在中に病気となったため，赤ずきんが訪ねていくのである。Choi, Seok-Hee: Zur Rezeption der Grimmschen Märchen in Korea. In: Jahrbuch der Brüder Grimm-Gesellschaft Bd. 6, Kassel 1996, S.105-126, hier S. 115.

39　グリム版とウェーナート版にはもう一つ別のエピソードが最後に付けられているが，これも『家庭お伽噺』では省略されている。また，フランスのシャルル・ペローによる「赤ずきん」においても，二人は食べられたまま助からない。

40　Sutton, Martin: Englischsprachige Rezeption der Grimmschen Märchen im 19. Jahrhundert. In: Brüder Grimm Gedenken Bd.12, 1997, S.59-77, hier S. 66.